戲作者考補遺

前編

204
152
2

戲作者考補遺

木村默老編

野崎左文氏遺書
門野重九郎氏寄贈
昭和十年下旬
慶應義塾圖書館

野崎藏書

戯作者考補遺序

小説稗官といふ事もいとゆるき世なりけれ既み漢書の藝文志にもと出るまで捨ハ街談巷説の細碎の言をも取て用ゆふ事なれども有り点ふ書徒ふ拾ふ成るをも物識り儒者學士ハ安ち惑ハし事を誘ふとて深く忌悪む人を在り正史實録ハ事もづのりくて俗耳ハ入易うく故ふ古の智ある人の俗ハ近き事ち設て勧善懲悪の端となせしあるをされば孔夫子も小道と雖ども必らず観ふ可き者ありとのたまへりかふ思へハや唐山ハも代々の書ハも小説の事を載せ置さり唐より以後ハ其道まもく盛むにて名ある文者も多く出て元中羅貫仲李笠翁

南原特藏
市村家藏

皇朝ふも空穂竹取の物がたりを初め源語勢語ハ事物り尽り其後女子ふ名ある双紙物語多し慶長以後ハ昇平日久しく文運大ふ開けしかるに小説の書いよ〳〵多く其作者も亦多く出て依て響ふ著作筋近世物の本作者部類と編述せしかども いまだ尋ふ廣くせざりしかるに豊芥も亦戯作者の小傳を輯めふ 余もかく聞けふ事有ら〻べ上の訃部の書ふ余が聞ふ所をば 悉補〻猶又作者の肖像浅さへ加へて此書とハなしけふし

弘化二年乙巳初冬

黙老人ちるした

凡例

一此書ふ出て戯作者の序次ハ大概其年齢の新古をハ〻ハ名高ち作者と新きハ次ふ新人と年古ちるハ前ふ

おもふ知る屋〻

一作者の肖像をおほハ最も高名なる人斗をおもふ名ある人とハ雖ども其没年久しくして画工も其面貌を識ふ按なき者も出るを得ぬ〻ハ浅ふせふ者もあり

一浮世画師の肖像ハ出て事ハ其稗史を給ぶ〻事の多くして且其名ハきて高くせへさる者而已をおもふ

一作者著述の書目をおほち其妙作ハ〻て世間ふ廣く愛玩せし物斗をおもふ其書毎ふちるさば不遑枚挙且ハ一〻ちるとも浅

ゆゑるが為なり

一平賀鳩渓は最高名の人きうと雖ども其没年久しき故子其面貌を知るふしなきまで古老の鳩渓を知る人あり てその形状こゝろかまとゝのふつきく恵係(おりおやり)て余が茶話ほとゝぎす茶理

一此書多々著作堂豊芥二子のまみ成ると雖ども亦墨川亭雪麿の説も頗る文中まコア考ほまコアいてくるゞく有 ハ雪麿の説と知ほ歟し黙老が説あるを黙老人或ら余なゞく ちほす

戯作者考補遺

丈阿

観水堂と號せ今より百年ばかり已前の赤本ふこの他者の名号にるるあり大抵享保の季より宝暦まくの人とおぼし何人なるや詳ならぎぞ

近藤助五郎清春

享保より宝暦の比まで行はれし画工ふく或他ども兼ねる享保中象の末つる折の赤本もの清春の自作自画ハ赤本の他多くあるしが今ハ世に稀ぐくなりぬ

富川吟雪

この吟雪も画工ふく作者を兼ねる当時自画作の赤本あり清春よりも少し後れて出る歟宝暦の比この人の画のくはざし多くあり

この比画工ふく作者を兼ねれども清春吟雪の外ハ画作とする せしりのとゝ
羽川珍重などもの例ありけん欤

遊子

俗称ハ丹波屋利右衛門とゝ明和年間初ゝ青楼のおもむけを肖として嫖客の
情態を綴りて遊子放言と名付く楊子方言の秀句ハ浪花洒落本や
喝ゝ猥褻諧謔の小冊子を作りし始なり

桑楊庵光 名ハ識之

亀井町の町代岸卯太郎つゝり天明の季の比四方山人狂歌を擯斥して
より狂歌堂真顔と倶ふ狂歌と唱ゝ随一の判者と称せらるゝ性酒を
嗜むの故ふ壮年より月額の跡みふ元て赭して且光まりよりてつゝりの
光と称せ當時浅草市人三陀羅法師浅草于則名皆ちの社中なり

戯作ハせざりけれども寛政三四年の比貸本屋の需ふ応じて宏道園五巻と綴
りて印行せしを宇治拾遺ふ倣ひて一段限りの物語なり板下の浄書も光が
自筆ゝ當時ハかゝふ物の本いまゞ流行せざれば巧拙の世評を聞くこともなり
ゝ寛政八年丙辰夏四月十二日ふ没しぬ駒込瑞泰寺ふ葬ふ

雲府館 天府

この作者何人なるや姓名いまゞ詳ならぬ寛政中 邂逅物語五巻を綴ふ
趣向ハ妒婦と賢妾ありて種々の物語りつゝり結局ふ妒妻本然の善に帰
して遂ふ席を譲り妻妾位を易ふる円満ゝ唐山の小説療妒傳を翻案せるなるべし 又同人の作ふ
桟道物語五巻あり 寛政十年戊午春の自序あり この比のよゝ本ハ一巻の楮数十五六頁或ハ
二十頁ふとゞまるもの筆畊九行ゝ十行ゝて細密なるぞ ゝ画も畧画ふて
巻毎ふ二頁なるもの全本五巻価銀五匁ばかりゝ文化年間より讀

本流行ふ至て書画剞劂の精密ある和漢往昔無比といふ〜

黙老考ふに小説の書を繡像ふる事唐山より初しなり演義三國志
水滸傳金瓶傳等皆巻首ふ繡像あり是ふるふ所の口画あり又書
の間々ふさ〜繪を加ふる西洋記平妖傳など皆さ〜繪ありされど當時の
江戸の草双紙讀本の類の精密ある和漢往昔無類ある理

ぢくさん入道
そぐろ物語 寛永十六年印本
松井正三
二人比丘尼
直之
吉原の草紙 天和三年印本
釣醉子
紫文蜜の囀 源氏物語を俗文ふ綴ふ濫觴なり此後廿五年あ〜物語延
宝九年の板なり風流源氏元禄の板若草源氏宝永の板雛鶴源氏是
ふ若草の後編なり猿源氏享保の板かふふ物のなきよう思ひ記〜て
種ふたぐ田舎源氏も似りたるなる歟し
松井嘉久
虚実雑談集
紀の常因
怪談実録
無名氏

辻談義

増穂残口

残口八部の書

此餘俳諧師其角が東國太郎と號して戯作せし書もいり

吸露庵

氏八建部（たけべ）名八綾足（あやたり）又作阿也太理 字八孟喬奥の南部の人也壮年ゆゑて江戸に僑居せ
京浪華あと遊歴せそ云ふ畫をよくして寒菓齋と號せ又俳諧ともよくして
淩岱亦八淩岱と云ふ画譜在て世に行ふ其行跡頗る奇多り近世畸人伝ゆ其
小伝あり蕉門頭陀袋と云ふ書を著はす是八俳り物ぐさるこのつゞ実録多り
西山物語を他ゆ是八其頃京師西八條村ゆ五しるを他ゆたるよし雅劇他者と
傾城倭荘子ゆ他りし同時なりといふ又本朝水滸傳又の名八吉野物語初編
訓編訓部と他ゆ是 皇朝ゆく水滸伝を俗文ゆ他るの初めゆく且考き他り物ぐさるの最初とりべし

再増補

宝永五戊子年三月の開板ゆ関東名殘のたをと云讀本ゆて是ゆ
芝居役者え祖中村七三郎の逝善ゆ他し物形す但し他者の名をバ
ちるさゞ忠ゆ岡はちゆがしとちるを今於五冊 江戸板ゆく駿河町泉長
寺清梓とあり又元ゆ古キ 貞享三年丙寅江板ゆとのゆ袋と
いふ上下ゆ冊の双紙ゆ元ゆ江戸板ゆて他者の名を出さゞ 此双紙八元ゆ
世ゆりてくやせし

俗法師といふ法巻物を
父母として作る物とつたる

岡清兵衛

和泉太夫の淨瑠理作者也世ふ金平太夫ト云ふ

黄昏日記 宝暦十年紀逸著 ニ云岡清兵衛ハ金平本の作者糸縷(イトヨリ)椎三ハ女形

の初形ト云ふ

『故郷帰泥江戸咄』 貞享四年 六ノ上ニ云前文畧 丁卯印本 十一丁ノ

扨又和泉太夫が淨瑠理ハ岡清兵衛と云ふ人の作るいつぞの程ふら

金時の

ふを金平也と云廣め渡る迄の仕ふがゐをたけつなと云てや

らかゝてゝ云りむゝかゝりに云つゝへゝ仕ぶんけい時宗あさいな

など彼金平が片ゐもたゝぬやうにきゝへ々ゝしばゝゝいやゝく

らんちんおらのゝとのゝどのゝい金平をゝゝるをきゝていそもあて

さぶゝをあぎゝりきゝだをかゝてよろこぶ程ふ金平といふて

をば三七のころ〳〵べ近とゝ志賀て日本國へひろまりたり彼金平
作りの法華經は生きつき七歳ゝて和泉ほうく太平記盛
衰記あづはかゞゝるゞゝをおぼふにおぼゝ佛釈迦の乃をもゝ
づいとろうゝ考れば古事本屋を引るゆるものゝとゝや世は
近代病死したるときて哀ふもおゝくも思ひ乃をしば
金平を作り岡清病死して惜や思へい学もゝけつな
ゆあるい貞享年中に死去せしると見へたり此人の墓不いはゞ
不知金平上野ゝ本ゝ寺ゝ久庫ゝ此ア(イ三十)ア(あ)ゝ
此岡清ゝ清ゝ死去の後ゝ新作の上野ゝも学ゝるゝゝ是近あり
きたりの物云ゝし奥ゝ乃せしゝるゝゝ見へられ近ゝ金平浄瑠
ゝ変へ近松門左衛門の名作ゝ此の人集に叶ひ此為ゝ古浄
瑠璃ゝ皆廃りゝるゝとなりゝゝ絶共享保寶暦の頃迄ゝ赤
本為ゝ本ゝとゝまゝゝ本板ゝ金平姫ゝと云ふゝやり唱哥もゝ乃り
ゝが寺所蔵ゝ天明の頃ゝ絶ゝゝ今に金平此名のゝ殘りゝ
晒木綿足袋(底を用ゝを)金平ト云(雲ゝ赤の彩ゝて絶ト云ゝ意ゝ
ゝて新名ゝゝゝゝのあるべゝ)
金平糊つよきゝる　金平牛房
金平煙草　昔ゝの今ゝゝゝ
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
此上ゝの和泉太夫の事　操芝居庭元考ゝゝゝ

和祥

黒本に成名人也

文子

夢中散人寝言先生氏

墨川亭日辰已園酒落本流行して後再板とゝ

平賀鳩溪肖像

乙巳仲冰　黙老漁隱因故老之説模寫

風来山人心地さぐるまへふかれて
人ふきめせ〜　發句

乾坤地をちゝめる
　　氷弓

ゝそや辞世の句ともいはん〜

附箋

一向山周慶　文政二年己卯七十四歳にて歿す延享三年丙寅ゝ生レ
一平賀源内高松を去り〜ゝ寶暦十一年辛巳ありしより十九年目安永八年
　己亥江戸ゝ歿す
　寶暦十一年ハ向山氏十五歳ゝ安永八年ハ世三七ゝ
一池田玄丈ハ安永八年己亥高松ゝ歿す平賀の死と同年ゝ

風來山人

風來山人ハ平賀源内ゝ戯號なり名ハ國倫字ハ子彝鳩溪と號す讃州志渡の人ゝ性聰敏ふ〜て本草赭鞭の学ふ精〜其祖ハ信州の豪族平賀入道源心の後ゝ源心晴信ゝ討滅せ〜れてよりその裔孫讃州ふ移り住むこと數世高松侯の小吏ふありぬ源内髫歳より大志あり才智衆ふ超へ且性誠ゝ成長ふ及て高松侯ふ仕へて茶用方を勤むその時ふ當り侯廣く和漢の鳥獸草木魚介貝金石の類を集め其形像と真ほして和名漢名蘭名を注〜のふ源内即君命ゝよりて都てこれゝ預りて其ゝ資助を後ふ職を辞〜東都ふ浪居〜て大ふ高名を発〜ぬエレキテル寒熱昇降水多の珍器域日本ゝて創製し初て金唐革を製造し且人参

を培養し砂糖を製し其國益をなすもの尠からず蝦夷産のイケヽ蛮産のゴスの類日本にもあるを見出し昔より日本に無きものとせる火浣布勘製都て何れも人の意表に出づ火浣布畧説物類品隲といふ二書の著述あり又傳奇院本を作るに名高く又雜著の戯作多く淨瑠璃本を作ること福内鬼外と称し戯作の小冊に風来山人と号せし後の戯作者に比れば持論学問庭逕あり實に近世の奇才之行状い任侠に近し常に食客の多きを厭ぞその末年に至て馬喰町に賣居の巨宅あるこの家の前主某といふ盲人高利の金を貸すをもて暴富にあらるる者あれい非理の事露顕して終りをよくせざりしをぞ志ふに此盲人死後に其亡魂毎夜宅内にあらはれて妻に迫しが又えぞくといふて尋ねといふ風さありしかばこの家久しく賣れざりければ價賤く成りるとを鳩溪に至て幸ひとして件の凶宅を購求め人の諫るを聽ずしてやがて移り住まるに聊も怪異のるなく是より半年あまりを経て鳩溪狂疾おこりされ怨て人を害せんば獄に下り十二月十八日病て獄中に死せ其從者某その衣中の類を橋場慈泉寺に葬ふ其友杉田玄伯私財をいて墓碑を建て表とせ墓表に智見霊雄居士

處士鳩溪墓碑銘

處士平賀君諱國倫字子彝號鳩溪称風来山人信州源心後也先世避難徙讃州志渡家焉君為人磊落不羈少有才辨尚氣剛傲讀書不事章句高松侯擧為小吏嘆曰丈夫處世當益國家安能黙鄉里哉無何辭遊于四方窮力産物竭理山川兼

精技術對諸侯則說以利國對庶人則說以利身故海内無賢
愚悉知其名諸侯或辟之皆辭不就曰人生貴適意何復為五
斗米折腰哉人或勸娶妻則曰我今家於四方何更求之累終
不娶君恒好客々至則必留之為設酒饌日以継夜未嘗厭倦
君素無恒産以之囊中屢空而晏然不省矣君所著之書有物
類品隲五卷行於世其餘我方所未知之藥物及火浣布類自
發明者百有餘種旁好稗官小説其撰又有若干卷安永己亥
狂病殺人下獄十二月十八日疾死於獄中時年五十一官法
不聽取尸其諸姪相謀欽君衣服履以葬淺草鄉総泉寺建石
以余與君故舊請余銘之銘曰

嗟非常人　好非常事
行是非常　何非常死

鶴齋　杉田翼撰

鳩溪著述目録

一物類品隲
一火浣布畧説
戲作之部
一根邪草
一根邪草後編

蜀山人肖像

一風俗志道軒傳
一飛ざ噂乃評
一放屁論後編
一里仇苹環
一菩提樹之辨
此餘淨瑠璃本數種畧之

一乱菊穴捜
一放屁論
一痿陰隠逸傳
一天狗髑髏鑒定縁義
一飛花落葉

文政六年未四月五日

蜀山人病死辞世

かゝるときなの子ぞはふ行べ

秋かりの間

夏と夏とを入相乃この秋

享年七十五

蜀山人

蜀山人姓ハ大田名ハ覃字を子耜とふ俗称直次郎後ハ七左衛門と改む南畝又ハ杏花園或ハ遺櫻山人と称ス　大祢下の士ハて礫川太田姫稲荷祠前ハ住す博識多才の人なり狂歌の名ハ四方の赤良狂詩の名を寐惚先生とふ中古以来の狂詩歌此人ハ到つて一変せり古風の狂詩ハ押韻も不慥ハくはしを平仄ハ不ぶちさりしハ翁押韻を正ふ仄し平仄とも分ちく種々の妙句を出せり後ハ翁の著述の書ハ書て見ル可し又滑稽ハ長ず翁或時他へ行ル迎君橡留の袴ハ本ハ丈の小袖を着ちくあるハ門外ハて其門人ハ彷徨しかべ門人先生ハ何方へ行ハや立流の衣服ハあと戯ハ遊ハ翁答ふ

蜀山ふるてる物ゞ記ッつふ唐のとかはゆ本の八丈
まゝ芝い遥以前天明の頃或時 ゑ侍の料理屋ゆく吉原の傾
城七越豆腐の田楽と唱へふとげ喉へ立ゝ大ゆ難義ゑる譬の座
おゆ蜀山人居あはせ吸地搖と名ゆてたゝき柏子とと
豆腐のとげとゞさゝ及のとげゞ。鶏の唐ゆ立ゞ。七越なゝふゝ
とゆとこのしゝく柏子とる的七越のとげぬけて大ゆ飲びは礼の為として一世ゆ
ふり先生と云ゝ名ゝ紙を出ゝ先生ゝ詩ゆ成形ゆ解り多く有ゝ
ゆくとぐ名い書ゝしゝぐゝ内多ゝ一枚ゝ志多めの原
ゆれゝ出雲社ゆあゝ孫ども諸ゆの紙を詩ゆ交了ゆ書れ
かふ敏才の文人なれゞも絵艸紙讀本は振向ハまゝ別の事とゝへゝ
天明二三の頃艸双紙の俤ありしゝども なのゝく春町 喜三二京傳等

二三子の作ゆ及ゞ其後ハ絵ゝ双紙を俤ゝざうしゝゞ讀本の俤ハなの多
但ゝ狂詩歌狂文抔ゆおいゝゝも近世海内無双とゝ名ゝ草双紙乃
俤も三四ゆふるゞ又洒落本の俤或も吉原細見の序などと
書ゝるもゝのゆ

一四方地あゝの　一濱ちきちゞ
一通詩選兼知　一檀那山人藝者集
一南畝莠言　一千紫萬紅
一一話一言　一俗耳鼓吹
一芦の落葉ふ　一玉川砂利
一半日閑話
芝翁の著述枚挙ふ遑ゝず

或時同社中同道おく堀社内へ案内せし道ゆて案内ふ屋そこ〳〵
節或人戯ふふ南無妙法蓮華経を題ふ〳〵て狂歌ふあとに
皆〳〵詠ふ屋そこ〳〵し時翁其ま〳〵
どの桜なるむ題目が出ようもなもむ妙法蓮華経の師
又或時翁の得意の地をよあ原
詩ふ五山役者八杜若酒ふかけ藝者おうふ料理八百善
酒八かのこ〳〵ふ八印四方のいろのふ〳〵山人素ふ
酒客の上ふ酒を別て略ま〳〵ふ
又一話一言とふ随筆の書ふ後遺言〳〵昌平坂の学館へ上
納す此書ふ百餘巻ふり

田中益信

戀川春町

駿州小嶋侯家臣ふく俗称倉橋壽平（源維名楨）狂歌を好〳〵狂名を
酒上不埒ま〳〵寿山人と号を戯作ふ戀川春町と名乗ふ小石川
春日町の邸ふあり住居ふる土地の小石川の

の字は假名を省き春町は春日町の日旧文字を除き戯號
なりとぞ繪を鳥山石燕に學びしが故に自画作の冊子多し
他の著述の冊子をも画く一説に勝川春章に學ぶとも云ふ且
安永四未年の著述二冊物あり金々先生栄花夢と題号し
邯鄲の枕向世に行はる同五申年高慢齋行脚日記を又大酒
あり寶暦以来の草双紙に多くして一変して専ら春町の著作
名を發す寛政元巳酉年七月七日病み卒す四谷新宿裏通り
淨覺寺に葬る 淨土宗大宗寺横丁本堂前六地藏の並に墓あり
法名寂靜院廓譽湛水 墓石左傍に辞世の詠あり
生涯苦楽四十六年即今脱却浩然帰天
稗史當り物の目録

花鳥かくさん坊 文軒翁云 此書は自陀落先生の傳に擬して作るなりと云
三升増鱗のもじ免 鼻岸峯高慢男
三福對紫曽我 間違曲輪遊 芋太郎屁日記 手那し
詞戦ごっこ 以の根
鯛の味噌づけ 四方の赤 大木の切口太いの根ときし
なぞ云に合を作せし紙あり
夷大黒若氣誤 汐矢宮易占 巻中具にやりし朝鮮のふけいし
フクリントウなど出せし考へ多し
其餘畧之 又小讀本アリ 西落本と云
無頼通説法 其頃の遊びの魂及を面白く書ふる
男女風俗通 男女の衣類小道具髪の風貴賤まちに画作を
其頃の風俗を今見るがごとし

秋田侯の士俗称平澤平格戯名喜三二又亀山人明誠堂ト号セ狂歌に手柄岡持の名あり俳諧ヨ月成狂詩ヨ韓長齢まさ天壽とふ晩年仕を辞して剃髪して後苦なき人とあらしと戯きて自ら平荷と名ぢく喜三二の戯号を芍薬亭に譲らる文化十癸酉五月二十日没ぬ墓ハ深川淨心寺に行年七十九才ト云ふ　享保二十年乙卯生ル

草さうし當りとの多し

故朽木（くちき）とふ五冊物の讀本を作るまさおらく物語後をむの物ぐるおどるふ三冊づの戯作本あり寫本みる　行ゆく

喜三二

右ハおなを春町共三二二子也肖像ハ畫工も時代違ゆゑ
知己ハあらざれども其面貌をうるハ[illegible]なし因てを此の書
ハ按つて其彷彿するをうるのみ但し或老人の話ハ亀山人
家の化物とうハ共三二他の草双紙ハおなを共三二の肖像を其
真面目を観るハ是をうるといふ是を知己の老人の言あれば
今黙老人を圖を臨寫して左ハ出す春町ハ於てハ考
按する所なく暫くこれを闕くのみ

天明七丁未の春の艸双紙
亀山人家妖ふ出る所の
花三二れ肖像

幾久

呉増龙

松壺堂

幾久

通笑

市場氏名寧一字子彦橘雫八其俳号ハ小平二と称ス江戸の産ゐして通油町に住居せ一生無妻ゐして市中仙たる好て稗史を作り安永年中ゟ寛政初ゝ迄若干巻を著述せ其趣意ハ教諭を以て旨とし故に世の人教訓の通笑と云ふ

文化九壬申年八月廿七日没せ行年七十四才 法華草 祝言寺に葬ふ 法名 覺法全心

雪唐大仁云

岡附塩町に住し表具屋某といひたるはしな人著作堂ゞ話に名ハ道寧字子彦といふ著述大旨世の人情常ゟ出る虚の穴を探して書とぬなりと云へり

醒世老人像

香蝶楼国貞画

醒世老人自像之賛

桜木よのわかゝ
そゝ〻ろ寒し山王社
積るこゝ三本さぶぬ
けさくゝや

京傳

京傳子の小伝ハ曲亭馬琴の著しるせるでりの記
略記せるあり
ゝ委しくハ曲亭ハ讓りて茲ニハ唯其あらましを

山東京傳

京橋銀座一丁目ニ住居せ烟管煙草入并家製讀書丸
其外製藥を鬻ぎ〻業とせ諱ハ醒字西星号ヲ醒々齋
又山東庵菊花亭乃号も用ひ俗称を京屋傳藏といふを以て
京傳と呼ト云ふ画を北尾紅翠齋ニ学ぶ北尾政演薄茶
といふ狂歌ニ身軽折助の名ハ文化十三丙子九月七日病ゝ没ぬ
両國回向院ニ葬ス法号

辨譽智海京傳　行年五十六才

○公羽ハ画を北尾紅翠齋に学て薄齋北尾政演といふ舊友自作
の冊子及ひ他の著述ニも画ぬ紅翠翁が筆ある　四季文加　二冊ハ寛政十

午年印行京傳の序「余嘗学丹青於紅翠翁以為業近頃換移其業鬻烟包烟管」略とのたまふ狂哥ハ身軽折助といひしみや

徳和歌後萬載集 天明中狂哥集ふたの如くなり

身軽折助 北尾政演

千早振かみはもみすがらてもたるとあるぬい音にきらまし

没年をりてかぐあふ彩ふ寶歴十一年辛巳の生もと 深川木場ゑ生ろと柳亭のそなり

まさ自作の冊子 作者胎内十月圖 三冊寉喜板 文化元甲子年ふその年ふて二十七年

戯作なるよ〳〵いへど安永七戊戌年ふ當り十八歳ふて初作なり

京山子ぶ撰べる墓誌ふハ十九より始て稗史の作ありといへりたれば安永八年刻成て發市ふ及ぶる時の事なれいふふて胎内十月圖ふ自ら書るハ稿本の成るる時をいふとのなり

○翁の戯作海内に行はれて遠境避地の老若男女その名を知らざる者なきとい更にいふ及きに非ど斯さば其風を慕て著作の戯業を学ぶんとて門人たらんと願ひ入る者志ぶ〳〵有ると共許諾ふるとなるといふ是も自作の冊子 絞染五郎剛勢談 および

方福長者栄花譚 両種共ふ文化五年刊行 ふ斯の如くあり「ふふとらおこるぬ〳〵くゝ」

とも京傳方へ戯作の弟子入るるゝふ断申ふ」と見へるり翁ふ門ふ遊ぶるもの近くい唯関亭傳笑のみと或人いひりり傳笑の小傳ハ下にあり

○芝全交存在のうち戯作に心を労し著述も若干ありて當ふの物もはゝ〳〵りといへども兎ふ角ふ京傳ふいつぞ及ぶとおりぬ〳〵人ふも談ぶるといへ

○或説ニ本姓ハ幷田トいふ一説ニハ又舊号を寶山といひしを古記冊子の印章ニ宝山の両字を用ひしなどあり且緑野園藏本浮世繪師考といふ寫本ニ閲係ニ宝山と号せしとあり前にもいふ如く翁ニ近年ハ門人なし但ハ門人ありしと見えて京傳門人亀毛と物ニ見えて又文化中ニハ門人幷田泥牛といふ名見えたり古記冊子ニ警岡勧進御富與行曽我といふ系あり山東雞告シホカセといふ名を記し京傳二十五暁序政のぶとひらまさ山東唐洲といふハ門人なり著述そ尾杉見我松雪女廓八朔に生まる

○文化十二乙亥の春予諸名家の書画を乞て秘藏し老後の楽ニそなへんとて書画帖一巻を製したれば一日翁の許を訪ひそれ漆筆を乞しニ翁ハ常ニ天満宮を信しぬるをいさの日も湯嶋の御社ニ詣で家ニ在ぞと舗の主管のいへりけるまゝ彼一巻を主管ニ向だねて漆筆を乞ふしを頼みきゝえ其日ハ家ニかへり異日ふたゝび訪ひしニ翁ハ書画帖ニ自詠のざれ哥をかきて贈りきたり然れども此日も又障まるとてかへりて終ニ翁ニ謁せざりき歌ハ詩佛翁が画ける竹の絵のかたわらにかくぞ

鬼がらぶきみうふすれどかくはあり角を自慢ニ身をなたのそて

○舗上ハ自画賛の扇短冊などをも鬻ぬるもむ自詠の狂歌発句の多くひ多く世人の知るところなれども中ひとつ二ツをあらハ挙げてなかりとおぼゆるハ釣鐘をあらがきて

家業夢中　始終滅亡　正直律義　格別氣楽

○戯作者常に稿本を草するとて紀を物さゝげきハ更ニ甚しきハ

寒暑を恶ミ来客の長坐をいとふ事ハ皆然る胸ふうかくしたる
筋を書とゝんとするとゝ思い碁ふ打入たる人ハ如く他念なくして
食をとゝ忘れ又よゝたゝにとりとゝ紙ちら慣てゆうたい子も覺
えあるゝとにて皆人斯の如くなるべし翁平常種本綴られるをりい
食器ハとゝ傍近くとり調おきて時を定めゝ欲とおりくるをりい
食しまゝ溺器をとゝの一間ふ置て小遺ハたゝぬといへり虚實
のゆゝどい知ざゝしゝども吾身にくらゝゝて尤もはゝあんとおゝき

○文化五戊辰年兌行せゝ冊子 絞染五郎強勢談 京傳作 ふ辻君を多く
画きたる繪様はゝく或ハ偏盲鼻欠まゝ鼻より頬へかけく
膏藥をひゝとうちゝほ様なんどのいと見苦ゝ故ふ画なきたる
を實の夜發らゝゝ見ていうふ吾々あきばとて斯まで見苦ゝ
様ふハはゝぬをかゝゝに画きひゝめたるハいゝなゝゝ作者のまゝ
業なり京傳といふえせりをとりゝ途中ふて見るるあゝゝ捕て
このゝを恨んゝのとかゝ称て多の辻君どりゝ相譚あいせて置
つるゝある黄昏ふゝち連ゝちて場所ふ行んゝとゝるをゝ叱ら不圖
翁ふ行逢ゝゝり翁ゝ中に翁を見知るる者はゝて彼ゝゝハ京傳
よいでおゝ捕て怨をいゝと下知せるゝゝどふ伴ひ連てる辻君ゝるゝ
翁ゝ中に取圍ゝ口々ふたゝゝり詈ゝゝて吾々ゝ彼ゝゝく悪ざる
に書なゝたるやと姦ゝく恨るにゝ思ひゝげぬ支あきゝい翁駭
ゝ大かゝあゝゝ翁のゝ外視も忘ゝく立ゝむさく汚穢て
限るゝゝゝ言を竭ゝいひゝゝむきゝもゝの輩い移聞いきゝたた
なきゝと厭ふゝ見ゝ故ふ取付すがるもはゝていとゝ難義ふ及べる

があらし乞丐ふ捧うちあらしば翁い兎に角にいひあらへて音信
ふこの記言の驗を見をんん今い放ち返ぶ紀よと怠状をーて
つびらきばやう屋くに怒をおさめて後日の事をかく約し頓ふく
散ぬきくらしむその場い事ふく遁きへを後日人ーて彼堂に
前日の謝物ーて聊の金を与へ其事をきはせーとあん虚言い
似くきども或人の物語きり翁ご名いあきより弥増に弘まるしと
云ア又一説ようの辻君を多く画くる冊子い寛政の初年の著述で
ありといふ然きでも予い其頃の冊子ふ辻君を多く画かたるもの
を視ぞ後の説ふ従ふとれい草紙の表題ばきくらあぶ寛政ま
初とえば強勢談ようい遥ふ前の事にーて年に甚たがひはり何き
を何きと定めがくく又話の虚實をも辨へがくくこて

○翁が著述せ歌草冊子讀本共ふ文体一風おくきらくとーて女童
ふも読得やすく尋常い聞もなきざる奇語見も習ざる僻字を
おほく用ひば画割の工風おとーろく目前かもりたるるをやとし
て粉骨もおくこ格別あきばば行きてーと宜たるる乳

○高名ある人ふい何事ふよくば是もその人のあーたる業ふ彼もその
人乃云くる言ーて尤もあきもも皆その人の事とーて世の話柄と
きるいあべて高名ある人ふい有ーてにて聊おりーあふーのざきし哥
あきばやもきれぞ蜀山翁の詠ーたるありとてーてにも安定
あふぬを世俗のいひりてきやたが如ーさきば虚實い分明なら
ぬど或人の語りーい一客あり夏のきーめる翁が許を訪ひきぞ
らく物語ーてあしふ折ーと食時ありりきばば主人い茄子の鳴焼

ーてその客の座に出ー食をすゝめたるみその客たゝぶきて
小娘もそや此さい酒ハ色はきて油つきうくをさーー多案
と申えたるをば翁そりあへぬ
油つけくーーしたるよりれども色の黒いはみをもつけうり
客も客うり主もあるーたり此両個が當意即妙感ぜるに
餘あるとも物がうれ

○近頃何人乃筆ぞさみあや 後言 といへる冊子あり撰者の名を隠せば
其人も知れ況その中に翁が撰べる骨董集の説をさる人の奪て
あのをが説の如くなる我翁さる會席上もく其人に對ひかの
説い吾發明なるを足下自説として唱らるゝい甚ぐ遺憾あり
と外ーときその人大音に我いでか足下の説を奪ん何ぞ
證拠ありやと居丈高になりて説破ぬうしらば翁いたるもぐ
逆上く論議するうちに持病の喘息大いに發して痰血を吐ー
盤興ようたるもらをして家に帰ーがあきより病く起ることあ
ぐ病床に憤死ぬうりき乞かの人ら乳死せーめるとと人あるを
知るとなりしと述るが然るや否いちぐぐ予が書賈文壽堂が話
に申おけるいさる類にあぐ翁ハ病ことと西三日ーて何事もなく
て没ぬ遺跡い家弟京山子継うりといひき

○浅草寺中人丸祠の前ーに建る碑の銘あぐびに本所田向院の
墓誌を得くその性氏精を知ると且平常の戯編筆力の大なる
が猶現をめれど左に挙ぐ
人丸祠の側なる碑文

明和六年己丑二月十五日歌九首とりあつめ時歌乃たまゝ

あちこちいろはり羽ひてめしふづくゑ形も

はつゝ高にもあるされぞほうさゑもおろそうまくみやゑ

たるかくも嘉那けれどさふふらゝ捨にそ成たのりくみくこの

ゝをさふ浪ひとり芝つゝあ利面ゝそ者千ふちかく行れ

ゝつくめる冊ゑ百歌をそえそう今いわのかゝろたまゝひ

ゑほをゝゝゝ内ゑこもこのすみ四くゑいろゝこれもたゞ泊き

かちよゆゑみ者ゝてゆろおいよ老ゝらへるさまあるゝあそれ

ゆゝゝい勢む

耳をおゝ古ゑあゝもくゝけゝゝりろゝもよ

世平ふる机なれを老ゝう

山房京伯

文化十四年丁丑春二月

愚弟　京山磐瀬百樹書并篆額

同碑背面

翁諱醒字酉星號醒齋又號山東庵稱傳藏以其所居近京橋一字京傳故其為京傳最著磐瀬氏其先出自盤瀬朝臣人上近世資詮者仕太田道灌七世隱於勢州一志祖信篤考信明仕某侯多病辭仕隱於東都市娶大森氏生翁及百樹翁少好稗史小說數百著作　富戲文幼説謬悠無根能令人悲能令人喜坊間書賈進於剞劂者利市三倍於是児童走無益於世改勵刻苦搜索奇秘著近世奇跡考及骨

董集二百年來奇談逸事考據精確可以補小史矣文化十三年丙子九月七日没歳五十六葬國豊山囘向院茅百樹埋翁幼時寫字案於淺草寺中柿本祠側以遺財建碑刻翁國字記言以告後之讀其書而不知其人者尒

文化十四丁丑春二月　江戸南畝覃撰

京山磐瀬百樹再書

窪世祥鐫

囘向院中墓誌

亾兄諱醒字酉星一字京傳号醒齋号山東庵岩瀬氏其先出自磐瀬朝臣人上近世資詮者仕太田道灌爲謀臣道灌亡並隱於勢州一志祖父信篤父信明仕某侯多病辭仕隱於東都市娶大森氏生二男二女亡兄為其良自幼好文十歳縮寫孟子今尚存家自十九始有稗史之作上梓者百五十余編因兹其名聞海内王公妾婦牛童馬走無不知矣今兹文化十三年丙子九月七日病没五十六告予弱冠出仕篠山藩病辭仕絆与亡兄同葦研有年無常風未玉樹碎痴心月照蒹葭栄嗚呼悲哉

愚弟　京山磐瀬百樹謹撰并書

窪世祥鐫

岩瀬百樹字鋏梅號京山岩瀬朝臣人上之遠裔
也父信明勢州一志之地士来江戸娶大森氏生
京傳翁百樹及二女百樹自幼嗜文武弱出仕
笹山侍従多病辭仕以及鐵筆之技為業自戯有
稗史之作乞梓者隨至編作日富與兄齊時鳴雖
然少作少作之名為大方所耻也時五十三已過
上壽之半故建壽藏自記名氏聊省亡後之労尒
京山岩瀬百樹誕辰之醉後撰并書
于時文政五年壬午夏六月十有五日也
墨水石匠　窪世祥鐫
寛政二季庚戌秋八月

岩瀬氏之墓

岩瀬傳左衛門信明
男　傳　藏　有　濟　建

○世俗己を善くしたる得たる者をさして自惚といふ自惚をば
艶次郎といふの詞はかの男を思ひ誤るらだべし艶次郎（冶欲）
などいふをもて自をよくと心得ぬる弱氣男を艶次郎（五ふの）と云言
は起りは翁の著述せし江戸生艶氣樺燒といふ冊子より自惚ある
若者の名を艶次郎と名付号たり紙大より世より行き
たりて廓中までも此艶次郎といふ詞行きて今も狂人口に
残りし今嫉妬を甚助とよぶ詞をやるが如く右の冊子は寛政

九年の刊行あり其翌年同十年に三和が著述る冊子を又繰返艶物語とふ京傳演戯画ぬ（前年に艶氣蒲焼流行るに依るの作意あるん左あらば自惚を艶次郎とふるの翁より始るとおりふる又洒落本の中に自惚をさて塩屋とふいふる故ちなぶ洒落本の作者に塩屋艶二といふ名あるハ前にも自惚の名二つに按て名づけるる戯名なれかるるを穿鑿するハをこなるあき業なるべ〳〵おもしろ〳〵ぬ〳〵も多くいづも博識の説を俟の〳〵塩屋艶二が小傳後にあり

文化三丙寅年發行せり讀本昔語稲妻表紙五冊を書賈文亀堂伊賀屋が藏板あり又同年印行の善知鳥安方忠義傳六冊ハ書林仙鶴堂鶴屋が藏板みて二書ともに世に行はるる其頃知ざる者なし然るにその翌〻年文化五戊辰年の春浪花の芝居両座ともおいて稲妻表紙の旨趣を狂言にもくみてせりが大に流行たるよりあり右につきて稲妻表紙の後編本朝醉菩提六冊まを發行せり同書の簡端に在とかいろ伐たに摸ぐせり

不破名古屋傳奇考

近年江戸堺町中村座にても右稲妻表紙の趣を狂言に仕組てせりまを安方忠義傳ハ近年天保七丙申年夏狂言に中村座にてせり名題ハ世善知相馬舊殿とふ〳〵二番目ハ世話にてお房綱五郎おを入六月七日初日にて興行せ作者中村重助宝田寿助三升屋四郎兵衛しの狂言ばかりん残念にて七月

廿九日見物するもい役割の滝夜叉姫後如月尼（二役うらふ 安方） 三役
十太丸藤浪五役ちゑ六やく円蔵於八やく絶友吳右市川九蔵
勤む良門頼信三やく二の瀬源吾四やく徳ゐふ五やく大宅左郎右
市村羽左ゑつ勤む蹲沼六郎二やくかげちか三役左近四やく佐ゐふ
今一役名を忘る右市川團三郎勤む小蝶前二やく錦木三役お房
四役小原右坂東玉三郎ゑ荒猪丸二役老熊三役佐七右大谷友右ゑ
ゑ大當ゑきにぐ松ど此狂言評判あしゑ斯の如く彼物語
の趣向を今ゑるゑ狂言ゑ仕組看官の目を悦ゑるゑ翁ぐ
誉とゑふ

其狂詠發句ゑ

吉原桜　面行とまぐ見ぬ花の廓ゑ羽

雪解　山〳〵の一度に笑ふ雪解ゑそこい省〳〵爰ハ下駄〳〵

狂言ハ秋の半でムり弁　柴のトぐさる月の〇（おぼろ）

押子如意を画ぐゑる賛

如何ゑ通子再来の意氣夜前のかゝとち猪牙船ゑ乗る

不破名古屋傳　奇考

貞享二年の印本ゑ菱川師宣の筆の繪卅紙二冊あゑ名古屋
山三郎絵尽と号ス詞書あゑく往古山城國小幡の里に——
住名古屋山三郎ゑいふ者父三郎左衛門正春の仇同國伏見の里に住
不破伴左衛ゑいふ者を討ゑるゑ北野のゑゑに住梅津嘉門共ゑ
遊君南間の葛城おゑるゑをゑるきゑいとおゑゑげゑて實記

ともおもわるべし又英一蝶の筆に名古屋山三郎仇討の繪巻物を世につたふるよりいへども詞書なければ殊に詳なるべし僕案するに延宝天和のころ土佐掾が淨瑠理節を作るかゝるが自然児女此耳に残りて漸世に傳へ〳〵と覚る山三郎が僕に鹿藏猿次郎とふ者あり此とふ貞享の印本舞曲扇林といふ草紙に記せる説あり又名古屋三ッ丸の卦所の娼家の奴僕に猿とふものありと雍州府志に記せり延宝八年江戸市村芝居に於て遊女論と云狂言に原祖市川團十郎始て不破伴左衛門に拵作せ時に三十七之山三郎に拵せるこの村山四郎次郎城に拾せる者伊藤小太夫なりこれ狂言大に行はれて一年のうちに同狂言を同戯子あて三度迄興行せるとぞ云刻伴左衛門に拾せる衣裳に初て雲稲妻の形を摺ぬいをぞまきとふ俳書に載せる稲妻のこゝろ見てより不破の関といへる荷翠の句にもとづきて團十郎自己の物ざゝめるゆゑ忘れて後伴左衛門に拾せるにかゝるゆゑ衣裳に雲稲妻の形をつくる事にあらぬ團十郎前ふハ◇めぬ氏の紋をつけたるが伴左衛門の狂言の後稲妻の一ッを轉じて回めぬ氏に更るゆゑ然で則三升の花ちハ回めぬ氏稲妻の形雷紋なり一説に草履打のゆハ元禄の末年花井戈三郎とふ戯子と不破某ゆゑ起りとも名古屋山三郎に拾せる衣裳にハ昔より定る花形ゆゑ僕稲妻表紙前編著述の刻稲妻の花紋俳諧の句よりとづきぬるとぞ山三郎の衣裳も俳諧の句にとゞめつきゝとゝと思ゝせゝ傘に祝ぐゝかゝゝよ濡燕といへる晋子の

句意をとりて出像花紋より春雨より燕の飛ふさまを画むれ
によりて這春浪速の芝居両座ともに山三郎の衣裳より濡燕
を備へつるより雲より稲妻両より燕より紀一對みてちらも濡とふ
小生に似合へかるなり稲妻表紙の傳聲につきて浪華びと
ぬき燕とりふ小曲をほうりてうぐいすをうたふ記せるめ
いとせの契りたぐへぬつむぐらい人のひきぢにせきいをまつけ
や、をむうんを。西より東とるをみをりをめ。さもうきしげにをを日
をおくる。つをぐふるいいーらに。不破のせき屋の関の戸より。せき
とをふをていふぼるや。あうふい見えてまぞともあけていをれ
ぬむ於のうち。つむにあはるそでの雨。りんい三つの傘に於ぐら
この於ふよぬをつぢめ

右あるハ人團好ほくまきり咲藤のをるぶをあぐ紀某
ふーをうせ紙ぐぐせり

同

各位の主顧より告たてまつる文化丙寅の冬〻本坊發兌せる醜〻
先生の稗史稲妻表紙前編六卷幸に行き今春文化五辰春浪華ゆ
戯場両座において那書の旨趣を傳奇より翻案て二艶（まのかう）とし
大より看官の耳目をおどろかる到おもづく後編渇望の人多し
おりふに清朝康熙二十六年乃春百花坊の雑劇より演義三国
志を翻案して千里柳塘偃月刀をほうり水滸傳を翻案て
千字文西湖柳をほうしより那両書の世より行る一段をほせと
より稲妻表紙よおりる和漢同日の談とふべーこをにようて再又

先生に乞後編一部を得て上木せり　四方賜顧の君子各地緑分の的書舗に就て索て一讀を賜ふの後好判語を所請寄也

則那両座傳奇の標号折枌の圖を翻刻して左のあらはせり

辰正月廿五日名道頓堀角の芝居二のうはり狂言　座本　嵐川辰蔵

きのふは不破の関迄
あすは名護屋山迄　けい世話輝竹紙　校合十冊

右狂言作者　奈川七五三助　近松徳三　市岡和七

辰正月廿九日名道頓堀中の芝居二のうはり新狂言

稲妻表紙は姿の彩色
十帖源氏は意の寫繪　けい世品評林　再注九冊

右狂言作者　座本　小川吉太郎　並木三四助　奈河篤助

追考

不破伴左衛門　市川團藏　中山新九郎
角力座　けいせいのうぐるま　藤川友吉　中力座　けいせいうつぐき　叶瑳子
名古屋山三郎　嵐吉三郎　名古屋山三郎　中村歌右衛門

京傳先醒の傳茲よの彩の餘ちぐの譚あり雖おもを外ふたるせ書このたびあれよりて其概畧をさらふるにたる

東西南北　安永五

風流友世車　イセ幸枝　二冊物

鈴木吉路　月六

錦鱗　月

杉連　物愚齋号　安永七

林正

四国子

亀遊

江戸顔肩八百八町　二代目市川八百蔵中車追善戯作

未山弓我

千百五十年ニ
當浅草開帳　三ッ比寶　二冊

可笑　伊庭氏猪子八と称ス
好で得史、著ス天明三癸卯六月三日没ス行年三十七戈四ッ谷
大木戸理性寺ニ葬ル法号

玄如院要山

雪ノ呂先生云
大木戸より右側の〳〵日運宗法号玄如院要山日昭トアリ
寺僧云今の伊庭氏ハ小石川鷹匠町ニ住居ト云ニ

文溪堂

臍下逸人

常磐松

窪田春満

千峯

朱樂菅江　大久保廿騎町

山嵜氏名景貫字道甫淮南堂と号し通称郷助東都幕府先鉾の士なり大久保に住せ始め漢學及和歌を内山淳時に学ぶ後更曲を以て人に知らる

寛政十二庚申年十二月十二日卒せ青山久保町青原禪寺に葬る法号

運光院恭安道父居士　元文五申年十月廿四日出生

辭世

執着の心や娑婆ふ殘るんすゝの、掃さらしなの月

唐衣橘洲

小島氏名恭從字温之醉竹庵又無碍館と號す通称源之助
田安藩中の士なりて四ッ谷ふ住居す夷曲を以て一時ふ鳴る享和二
壬戌七月十八日没ス赤坂淨土寺ふ葬す
心眼院開譽得聞居士

芝全交

天明五巳 板馬鹿夢文盲圖會
以北尾重政画寫

芝全交ハ草双紙の俳諧ハ大ふ當り物なりて名高くしかども其身
在世の日嘗て云ハ吾草双紙を作ること既ふ久しくれども
の作をもふ者ふ〜絵双紙を一年切あて復古板を摺り出すこと
ふ〜いとで部ふるふよくこ本を刊行せ〜さて後ふ貽さバ文墨ふ遊ぶ
甲斐あるべ〜とて宿望胸ふありるぶ當時の流行其処ふあ〜ぶ
黙止て〜ろを歴〜ろかくて寛政中ふ至て全交禅学新一名全交通鑑
といふ俳風の教訓の中ふ滑稽をまぜへ五巻のよこ本を作り〜が全
交没後その妻子遺稿を以て書賈仙鶴堂ふあつへて印行せ〜めた
まぐも道学の冊子も既ふ衰ふる比なれバその書も弘く行ハるざりしハ
惜むべ〜

芝全交

芝飯倉町俗かくまけ町神谷町ニ住居〜ぬ大藏流の狂言師ふて俗称
山本藤十郎ト云寛政五癸丑年六月十八日病て没〜ぬ
戯述上手ふて尤當り物多〜その内ふと能人の知る所ハ
御手料理御知而已 大悲千録本一冊物袋入 合羽大佛縁起 半紙本
此書より戯名を大ニ改め天明元年丑年ふ初めるるや
煙競蕎麦屋之薪 南無大通佛開帳 適一聲女暫
ニ乙ふ初舞墓なるべ〜

風車

是和齊

亀遊蓬莱山人

南陀伽紫蘭

志水燕十

艶　美　在原天明元

雪岨

魚佛

風物

三樹

豊里舟 天明二

耕雪亭桂子 安永四

柳川と号す

櫻川杜芳 岸田

俳諧をよくして言葉綾知とゝふ名あり芝神明前に

住す

宇三太

古風

馬鹿人 奈蒔野

新杜 四方山人門人

楚満人 南杜笑

芝宇田川町ニ住居セ書肆俗称楠彦太郎
敵討の草紙を中興して其名を發セ文化四丁卯年三月
九日没セ西窪心光院ニ葬セ
墨川亭云
芝神明の辺ニ住居医を業として仙白ト称セト云ヒ

萬象 竹杖為軽

森羅亭と号し天明四甲辰年分稗史を初ム此人桂川甫周
法眼の舎弟森島中良とりよ平賀源内門人にて後ハ二代
目風來山人と改名セ

唐來三和　伊豆亭の号あり　狂歌を蜀山人に習ひて
本所松井町の妓院和泉屋源藏といふ武士なるを
加藤氏書肆蔦屋重三郎が弟分にありて和泉屋へ入婿せ
ゝといふ没年不知墓ハ深川淨心寺にあり

辞世

かりの世は地水火風をぬぐにあらこれで五輪もさゝひきいかし

黒鳶式部

山東京傳妹　狂哥を詠ト戯作の著書　二三部あり
人不知思染井　三國一大通本地

天明の末早世せり

二本坊霍志藝

飛田琴太

古河三蝶

幾治茂内

里山

邦杏李

紀定丸　公藩

初号野原雪輔俗称吉見儀助牛込豆腐内屋舗に住居す
狂哥を詠じ高其名高し草双紙の作は天明四辰同五巳
両年頃二三部あり

皈橋

蓬莱山人と号し高崎侯の家臣なり俗称河野
安永年中名洒落本の作ホ嘗り多し草双紙は天明年中に
五六部もあるべし其後主君より戯作を禁ずる

田螺金魚

神田三河町辺の醫師の子なり

傾城虎之巻ト云小冊大ニ行られてより草双紙の作見えぬ

戀川好町

恋川春町門人ゝ数寄屋河岸に居住せ故ゑ春町に習ひて屋の字を除きめ好号せり俳諧歌の宗匠たり狂歌堂と号以寛政年中鹿杖山人ト云て青本の作あり初ゝの狂名鹿津部真顔ト号し後ニ師四方赤良より四方の号を譲られ四方歌垣と名乗り狂哥の名人なり又茶番を好ミて景物を設

ぐ〻に使ふるハ此翁が始るといつて此連中をてい好屋翁ト云て俗称を北川嘉兵衛と云町役人なて汁子餅（今ときやぐら汁屋ゝを鬻て業とて後商家を廢せり文政十一年丑五月二條家より宗匠号を免許せらるゝ折烏帽子葛袴を賜る文政十二乙丑六月六日病ゝ沒ぬ于時七十七歳小石川三藐坂極樂水上光圓寺に葬る法号

俳諧歌場壽譽福阿真顔

辞世

味ゝ喰ひ暖ゝ着ゝ伊不足七十なゝ住南無阿弥陀佛

狂哥堂六樹園と常ふ其中むつまじかりし時ゝ文化十四丁丑年中村座顔見世狂言大名題看板「花雪和合太平記」ゝ故墓東

三津五郎岩井杜若是まで其中不和あて文化八辛未年當
年迄七ヶ年の間一座の勤めるかりし處双方のいき連中よりの勤
より終る熟談懇ひ一座の勤といあり思故ゑ大名題に和合の
二字を加へ〳〵と見えたり（是もむかしの海老蔵と宗十郎の例を引なるべし）此節狂哥大先生蜀
山人此狂言之拙のをりかく飯盛り真顔常ゑ中睦〳〵かざ
り〳〵を風る思ひ出〳〵西門弟へ使をてせ〳〵に両人い何心なく戯場
に来りなれば蜀山人中なるい秀佳杜若の中直りを思ひ付ゑ方
達も常〳〵其中ゑろ〳〵かるぞ両人い我羽翼の門人と今日より
必ずのとく水魚の交りいるそ〳〵とて中直りの盃事あり
幾ゑる其節　真顔

是までのだんまりの幕引之〳〵氣も相肩のもとの棒組

飯盛

膝と云ざよい中むかの下桟敷二ゑんつきの座ぐてだはあ
狂哥堂い盃をとりてさぐさるゑ右の狂哥せ〳〵中飯盛い
餘程ノ手間どりてめ好せ〳〵と云〳〵狂歌い真顔の方名人
ありとな人静廬先生物がゝらきき

著述

長者の飯喰ふ

元利安賣鋸商内

是天明五乙巳年初刊行

涎繰當字之清書　袋入　金太郎　桃太郎　むかし〳〵噺問屋袋入

右い恋川好町作トあり何ゑも妙作

大仕掛三界曽我　寛政五癸丑年　秩父屋板　豊國画
鹿杖山人とあり　序文真顔の名出ゑ

夢中夢助 天明五

二水山人

録山人信鮒

鳴瀧音人

芝甘交

白雪

自惚山人

半片

鶴一齋雀千聲

物蒙堂禮

戀川行町 春町門人 天明七ヶ年 李庭亭と号し著述の書多くべ

落シ咄

百福物語 小本俗、油揚本ト云 春町喜三二行町掛合の作なり

宮村吉李

山東唐洲 京傳門人

七珎万寶　万象亭門人

芝増上寺門前翁屋とゝふ餅菓子鬻ぐ家主之後三代目森羅万象と改名せゝぐ世に行ひてゞ故に狂哥師とあり四方真顔の弟子となりぬ

著述

海中箱入娘天明八年三冊　酒癖管巻太平記上同二冊　愚一心通有板　苦者楽元〆上同二冊

再按此三部ハ二代目万象が未だ七珎万寶と呼びし頃の著ゆえ此万寶ゞ作ゆへあるべし

千差万別　万象門弟

二代目
萬象

森羅亭又南湖子と号し住居櫻田善右衛門町俗称福島屋仁左衛門ト云初號二代目竹杖為軽又七珎万寶ト云〻

虚空山人

石山人

甲亀

内新好 天明八

墨川亭曰

魚堂と号し印章に内田とほり氏なるべし師墨亭に白銀

墨一丸ともいひなるまゝ新江と作名を下しなほり弟人

ゝ否を不知先年小柳町に内魚堂といふ表札あり家を見る

ものしが彼処に住居せしゝ将外人なる旨ト云〻

壽阿弥先生云

内田屋新太郎と云表茅場町に住居し帆布桛木帆綱〻

類を鬻ぎ餘程の大家なりしが後零落して家を廢し小林

筑後守用達の養子と成しが爰も離縁となりて後本所

石原町に住俳諧宗匠魚道ト又堂氏書改其後鹿嶋屋へ引取病

死スト云〻年月不知

櫻川慈悲成（杜芳門人 天明八ガ） 一書、錺屋大五郎ト云

芝宇田川町住居ス樂亭ト号ス俗稱大助 始親ノ慈悲成ト云

天明年間より戯作發市青本落話の小本多く餘り行きて

且茶番狂言を好く名高し寛政年中に行き一枚摺ト云ふ哉

他に尚りあり其一二爰に志るす

口合兄弟 繁升 增ほるぎ 嘘字尽し 其餘略ス

或人云初ノ鞘師なりしが後に落咄し世ろり世ろと云

又狂哥をよくす狂歌觸ト云

悪筆人ヨリ〳〵形ろ

力弥サンの内屋敷ハモウコヽカエ

波銭の十二文盲無筆にて四十八文字ヤット書假名

墨川亭云

初号親の慈悲成ト云櫻川杜芳ガ門ヲ出ヅ戯作狂哥の道に遊ぶこと久し傍に茶事をよくして諸侯方より召る事まゝなり又画をよくして故焉馬翁と俱に中興落吐の祖ニ五代目白猿七代目市川白猿と友なり芝樂亭の号ハ若きころ接たるるべし又藏書の巻物狂哥あり則慈悲成自筆にて海老に三升の紋を画く

ふるさとをしてもこ供らおなじやうに團十郎と正月がほ

門人 櫻川甚孝

芝西應寺に住居せ幕間の誉世に高く諸侯方へ召され別る岡山侯濱松侯愛しのぶト云〻又古書を多く秘藏るよし門人に櫻川善孝あり 天保六乙未秀没スト云〻

櫻川女松朝

墨川亭云 慈悲成娘ゝ又門人なるべし 著述

舟玉物語 文政四刊行

慶賀　柿發齋門人
寛政元

陽春亭と号す

錦鱗　深川トアリ安永年中の錦鱗ト同人か

和歌林泉

心部琴好

莞津喜笑顔

俗称美濃屋甚三郎書肆ナリ涌泉堂と号す狂歌を好ミて狂名
涌泉堂真清と呼ぶ又美圖垣愛亭とも称す

斬東　錦森堂

伊之助　うきよ　寛政元

清遊軒

伐木丁丁

傳樂山人

美足齋象臨

喜三二 二代目是三橋喜三二ト云狂哥 初名 潛亭浅黄裏成ト云今芍薬亭長根

下谷三枚橋ニ居住セ故ニ枚の字を除きて三橋ト号セ本阿彌家光悦より七代の孫ト云ふ狂歌判者の大家ニして姓名菅原名ハ喜三二ト云ふ且手柄岡持より喜三二の戯号譲渡證文ニ云

讀書万巻始ニ神に通じ奈良茶三斛始て俳諧に通ず

今や大通日ニ茶をいひ傾城人を茶ニして此茶を呑ぬと

萬石ニ始て小便ニ通ず麥香煎の本意を達セ挽割名

遂て身退くハ天丹を見めの乃るを以ニ自今以後喜三二の

戯号をして譲りおく事實正也然ルといへども洒落ハそんで

口拍子なるもいとこゝろへる此名をもてひらかさんとの腹あり
らば脊中の方へ五六寸寄て章門如件

浅黄裏成反　　喜三二翁

信普寛政二

緑山人ト号ス

勝圃一瓢齋

有面

時鳥舘

蔦唐丸　本姓丸山氏ト一書ニあり

書肆蔦屋重三郎　初め吉原大門口ゟ吉原細見を繁ぎ後
通油町ニ住ス喜多川氏名柯理ト云耕書堂の号あり

雪广呂先生云

唐丸八頗俠氣あるて聊文ある者ゝ若氣て放蕩

るを食客とす一時賊の散ずるを厭そむき逃げ去りぬ
小方をゝて名をあせ一人こゝに蜀山老翁うゝ广呂
馬琴抔其間ありとゝ又已が名顕はせるも其人こゝ
よりあとゝ寛政九年六月三日没せりとゝ又
逸人画史こゝ云寛政八己三月六日と行年四十八歳とゝ
山谷正法寺こゝ葬せり友人石川五老碑文を撰せりとゝ
或人云
馬琴は京傳方へ弟子入りせり処京傳の家こゝ置がく
耕書堂の書役より京傳ロ入して遣せりるありとゝ
云ゝ

樹下石上

羽州山形侯藩中梶原氏俗称五郎兵衛市中山人と号せ
作風は楚満人に倣ふ後日出家ものゝを著述こゝ石上
が子孫梶原平左衛門と云ゝ

振鷺亭　名貞居と云画は鳥居清長こゝ学ぶと云ゝ
本船町こゝ住居せ家主あるく俗称を與兵衛とゝ猪苅氏初め
濱町こゝ居せる後は流浪して川崎五大師河原邊こゝ僑居
して手跡師匠を業とせ酔て入水して身まかりしと云ゝ著述
の書数多あり

著述目録

自惚鑑 小、万象亭序 天明九　客衆一華表 小、関東米序 倍宿閣主人校 東山見番　意奴之口 小

翁曽我 中本　誹見通三世相 翁後乃 中本　伊呂波醉語傳 中　門雅話 中

千代曩姫七變化物語 北馬画、寅、讀本五冊　春芽秋冬 五　豊国画

阿阪妹脊山 六、北斎画　俊徳丸 五、北馬　復讐猫股屋舗 中、北馬 文化五

今西行東下り 二　成田道中金駒 二　十社詣 二　己ノ日待 二

振鷺亭咄日記 小　玉の蝶 小

関東米　振鷺亭門人

辛井山椒

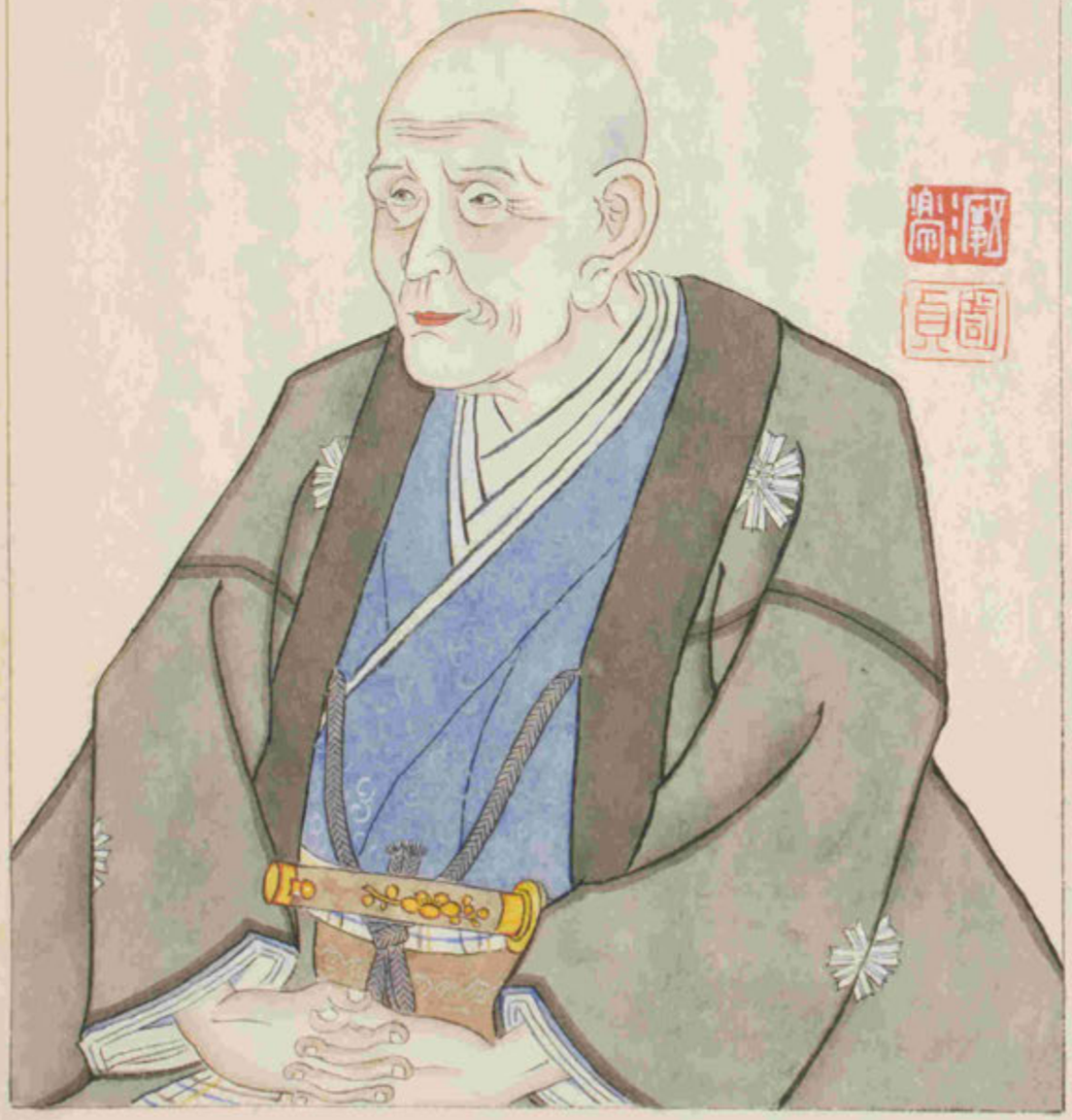
夜ゝ道久良記 寛政三

秋収冬藏

俗称石七藏ト云佐野家ニ仕、後庄三郎ト改、再文ゝ進ト改名ス

天保七申五月十一日没セ寺ハ三崎現世聖天宮安置ゝ寺

著作翁肖像



荒金土生

大榮山人　京傳門人後曲亭馬琴

見得坊　寛政四　万宝門人

信夫跡彦

曲亭馬琴

四谷信濃坂上（目印竹垣ほぐきの内子出格子あり）に住居せ名は解字は瑣吉瀧澤氏あり俗称は比は清左衛門（右）といひ元飯田町中坂下南側中程ふく町吏たりしが（地主小林勘平）老年に及びて其業を聟に譲り清右衛門（右）を名乗り隠居せ分は男宗伯と同居せ（宗伯は松前侯医官神田明神下同明町）隠居せ文政七の頃より剃髪して笠民と云ふ

馬琴は寛政のはじめ京傳の門人となり京傳より大榮山人の名を贈る是深川永代寺門前の出生なり永代寺の山号をもて戯名とせ寛政三辛亥年芝神明前和泉屋市兵衛より出板の二冊ものなり

外題は

京傳門人
大榮山人作

（廿日余つゐやして盡用而二分狂言四十両）

芝戯作の最初は寛政五癸丑年分自分馬琴と改せ年は

浮世街道御茶漬十二因縁　三冊　荒山水天狗鼻祖　三冊

花團子食家物語　月

天保七丙申年八月十四日翁七十歳の賀筵を両國柳ぢ

万八楼上に江戸中の雅人を集會せ此以前予が茅屋（永寿堂西村与八）仙鶴堂（鶴屋喜右衛門）其外二三人翁を誘引して訪来るふ

折ふく小子他行の面會をゆるして残念なるき其節

白縮子に亀画自賛の帛を送らるゝ予も會日席上に出さ

賀せて此日楼上ふ面會せ〜い柳亭　墨川亭　墨春亭

花笠　松亭　其外書林地本問屋抔い皆世話役く

墨川亭賀奇
七十翁愚ら百でも二百でも心乱れ次第いきな節さみ
曲亭男を宗伯といひて方技（クスシノワザ）をうりて松前侯に仕へ名
を興継といひ号を琴嶺と云画をよくせり金子金陵の
門人なり（玉照堂謙斎守忠房芳流舎の諸号あり）。
多病みて終に天保乙未五月八日卒す時に三十八歳なり
小石川茗荷谷深光寺に葬る法名
玉照堂君誉風光琴嶺ト云〻

○まさ翁ら剃髪い（傾城水滸傳初編八巻翁自作）文政八乙酉年の新板〻
巻の八花がらの阿達が剃髪のとおりに書入して
呉竹の世にそるあるをゆふ私ども髪の毛ちぎれたるふち
ゆうて元結のとぶきうあるを油こちく物ぬるがいといぶ
せくも煩〻きみいめる皐月のそぶめつゝからべをあん剃
まろめて「雪みのるさいづちもおのが白髪もそりあてそり
夏ハさみよ紀」とくちずさこて記そう笑ひおと海
きうばあぐ〻され繪ぐみみとうあそせ〻書入のうえ
くさとそ ゆあ〻さい〻

斯きば文政七年みの稿本を成めるにてその年剃髪の證
らそべ〻さて原を武辨の家あるしが翁を多病のあみ市
人とあるども聖学の学頭名たる三介のそば一人柴野彦助を
師とし学べで学力の長ずること他の稗官者流のなぶ所に非ず
稀ハ児戯の小冊子を編ムといへども翁が素意さるよにふべ
ゆえに先年著述するところの（燕石雑志）および（玄同放言）此
ごきい有用の書にして大方もふを図さうの説ごとおろを見

とに今年（天保七戊申）七十二歳おのく精力衰へて益盛なりとふ
ゑ〜稿を草するとき俗なりふぶつほけ書にして綴りめく〜
文章水の流るゝがごとくかゝる淀むことなく文体一家をなして殊に
讀本の著述おほく就中世に聞えたる拙い椿説弓張月
朝夷巡嶋記 里見八犬傳 の類也 開巻驚奇俠客傳 近世説美少
年録 の二書ハ近年の發行なていまゞ物語の半に至ゝて編を
嗣ぐ佳境にいたゝば評判まをく高かるべゑ〜まゝ近頃合巻
ゝ 傾城水滸傳 あり大なる世に行はる八犬傳ハ今九輯おいたて
滿尾するゆ近〜と聞ぬ此編の行るゝるゆ古今双ぶ物なるべ
ゝば有左ゆゑに近年浪華めく狂言おゆ〜ぬるよ〜聞え
ゝ浪速の画工が画るゝる大錦絵数枚書賈文溪堂の藏ゝる我
見るまゝ江都おく狂言ふせ〜い天保七丙申年夏木挽町森
田座おく名題八犬傳評判樓閣といて興行に狂言作者
金井由輔寶田壽助三升屋四郎おゝ一時墨春亭
梅广呂ゆ誘引きてこの狂言を見物をゆしばその役割のひとつ
ゝゝ我爰にいたん犬塚信乃二やくあゞ〜左母二郎三役犬村
角太郎四役鳴神上人の犬山道節五やくどこの土太郎六役
犬田小文吾右市川海老藏つとむ犬坂毛野二役白雲三やく
糠助四役藏人五やく山林房八六やく犬飼現八右市川九藏つと
む濱路二やく雛衣三やく伏姫の夫の雲ぬ間右尾上菊次郎
つとむ荘官蟆六二やく馬加大記三やく文五ゝ右大谷友右衛門
つとむ在村二やく船虫三やく黒雲四役額藏右市川壽美藏

つとむ亀篠二やく成氏三やく飛番太右市川升太郎つとむ
梶九郎二やく氷上宮六右市川一友つとむ大江親兵衛市川
團十郎つとむさのゝ當りあていあるしが狂言い面白く芳流
閣の場むよりそが中にて予熟市川白猿がそれゝの役ふ
打扮そがゝを視るに悪猥ゞるゝ土太郎がちら〳〵馬琴ゞハ
大傳の口繪お在しまちと違いゞ絞染の褌迚故柳川が画る
ま一点たゞゞ衣裳まを迚精細ま心を用るを斯の如しと
獨たんそゝたりき其後ゆい今年天保九戊戌年閏四月
より市村座まゝ名題戊歳里見熟梅といひて興行せしが
見も亦たゞゞしき評判いあるし然きども芝居の狂言ゆまで
仕組ゝせるゝい京傳子馬琴がさいよりあれ面目といふべきのゝ

○天保七丙申年翁が齢古稀ゆるびぬ諸人ゝ集めて年賀の書
画會筵を設くゞ初を許諾ざるしが秋ゆくまで
ゝ終ゆそのゝゝ免ゆまうせゝく八月十四日柳橋萬八樓上ゆ諸人
を集會しむゝの日ゝあゆゞ盛會あるゝもかゝて知己あるのゝ
あるゞ当時い濡玄鳥栖傘雨談前集幾市ゆゝ前後二編
とゝに序文を翁の書きてる因深るゝ迚ゞ他人をゝしゝめ
誘引して出席ゝそのいゝ書貫文渓堂翁が孫興邦を將ゝ予
が家に訪来ゝ自祝の賀哥をものせ齊仇あるい富久
沙ゆゞ成送ゝりその賀哥を左ゆのゝ
尽せゞなゝそひゝ古ゝ亀のゝ長ゝよりゞら嶋をゆゆま信
名ゆゝおそゞ出よ千とゝのゝ友にせんかれゝの亀かれ笠松

賀筵の當日東里山人ふたゝび初て面會に先醒ヨ扇子
ゆゑ〳〵てをとゝく〳〵れば辞退ありしゆゑせちゆゑめれ
ど書て送りぬ

馬琴翁七十純賀筵をこゝ保ゑ〳〵
七十八年百でも二百でも手象作ゆゑいきな爺様

○翁近きころ老眼やゝ〳〵に病衰〳〵終ゆ肯となりぬ
然れども著述をやめば媼をして筆をとゝ〳〵ゑたのもし口授
して草稿を代寫せ〳〵む

八犬傳九輯五十三ノ下

回外剰筆

上略
恁而寛政二年の冬創めて戯墨の画冊子二巻を編く
書肆甘泉堂ゆ刊行せ〳〵より今に至て天保十二年丑秋八月五十二年
刊行の雑書物の本芸より二百九十餘筆に及ぶり這他刊布せ
ざる筆記雑纂或ハ二三葉の小紙子多くを数へ盡ぶべ
もなければ下略

同

上略
否とよ 洒家ハ昔より戯墨を門人とする者ハ三四十年ゆ
吾戯作なる画冊子に門人料蕾子作偃子などゆ名號を
出しるもあれど皆ハ未生の人ゆ一時の戯ものゝ實に其人
あるにはゝば然を文化文政の年間生狂才ある壮俊ゆ吾ゆ
子はなゝまくゆりして由縁ゆ紹介の人を求めて漸次ゆ
訪来ある者八九名あれど吾一人も先を許さば中略そゆ

中ふ入門御辭退の義ハちかふ及ぶたいうで戯作ふ琴字を許〳〵ゐとふ琴字をもて名号に做ふものハ吾のゝならぶ昔を今も儒者ふ琴所琴墓ゐどあり其ハ各位ハ隨意ゐるべ〳〵とふに皆歓びく或ハ琴雅又琴拾或ハ琴川又琴魚ゐど先る者五六名ゐるしゐども吾も一両捻の程にして風く胡越の如くなりぬ今思ふに三十余年の昔なるもべ其人猶生るや死せりやいまゞ知ぞ是等の内ゑ櫟亭琴魚ゐゝ同じ〳〵ゐば是ハ吾知音ハ友伊勢人篠齋の弟ゐく窓蛍餘譚青砥石文ゐどふ物の本ハ作者ゐるしに惜むべ〳〵四十余歳ゐく身故ゐ死下畧

○東岡舍羅文ハ馬琴子ゐが兄なり性俳諧の発句を嗜み吟る

ふ多〳〵諱興昔稱墓右衛門ふ寛政十戊午八月十二日没于時歳四十深光寺ふ葬る法号深誉勇遠羅文ふ墳墓の墓石に病中の吟を馬琴ふが書たるを彫ゑれどゝ歳月を経ゝゝもべ石面滅く讀取安ふ紛ぎさくにゐらゝ〳〵ゝ

○里見八犬傳の孫ふ全局を結び訖〳〵ゝき「あいもしとハ見る人おゐ〳〵八重ゐぐゝもかるるやゝ月ふあゝゝゝ書」「あぐらゐるかひゝゝゝゐゐれ見えぬゐるし文巻川ふ猶ゝゝる世ゐ」「筆捨の朽れゐる葉と言の葉も子等ふをゝ〳〵ゝかくゝゝゐるぬく憂き

○文政八乙酉年九月二日菊と初く知己となりぬゝのち文政

土子年八月廿六日一冊び出會せしがさいの時翁が初く著述せるも
る冊るを問ふ翁くうくく云寛政二戌年深川あて何やゝん
開帳のはりる時京の壬生狂言来り大ゆ行きてくれで其事
よりおりひ起て遣果而二分狂言といへる二冊物をあみて
芝甘泉堂くう豊國の画みく翌亥年發板せりそれよ
うち續き新作せり是まで自作の冊子一も漏さず西苑
せゝが飯田町にて一年の夏二階の物干に出てくひ
のくあ冊るを風よあくたるとそれ不久吹やりゝん文化三寅年
出板せる武者修行木齋傳一部をいづこへか失ぬさる間の
後い骨董舗上るゝどあく其の物はゝば買とくんるを思へ
ど近頃ゝ歩行自在を得ずして杖を沙庭の外ゆ曳ず遺

憾さいさのるのこと語くしられむ予答くいふ在下動のいな
ある日い市中を徘徊せりい故ふとゝ彼木齋傳の骨董舗
上に在て有を償とりて進ぜんとまくへ常ゆるの事
を心にちあゝおおよそ間三とせを隔約せゝ時より五年に
ゝて天保三壬辰年月日い忘ぬしられど量ぶに彼双紙の手に
入さを日を経ば国霜月三日翁の許を訪て懐にせゝ
木齋傳を手へりゝて翁悦ぶと大とあくば約せゝ言を
違るまじきの賜物い何ものもまゝ添なゝおん心の切なるう
全くおん手に入るゝ長く秘藏ゝ伝るあり是ゆて拙作の藏
書閲ざる事を得くうくく欣喜の色あふれぬ

○翁が齢とゝ天保六乙未年六十九歳なれば今ある明和四丁亥

年の生涯おのく廿四歳のとき初作の二分狂言の草稿成あるに
二十五才の時新板とあるはそのあり
○一日翁とむかひ双紙の物語ありあるべきとおもふて曰黄表
紙の行きてそのい喜三二が文武二道万石通まきその後三
和が天下一面鏡梅鉢あり此頃より双紙の改むつかしくなりたる
こゝ酒落本と称する物みていハ京傳が昼世界錦の裏あり
と語らるゝこゝもこゝ此草紙どもを閲らしが當時此
禁忌の事なきみゝとあるべ右翁の物語ありて思ひおも
るあり文壽堂丸屋文右衛門いまゞ書肆なりし頃かの家の老母に
語てふむかし京傳が他の天下一面鏡梅鉢作ハ三和あるいハ京傳
そのいまゞ老母がおぼえたら
へるかゝ大ゐ行きて板元い耕書堂蔦屋重三郎しがその版ハいまゞ新
吉原揚屋町に住居おのく加の草紙の賣ぬるゆ夥しく問屋
仲間いふも更なり諸方小賣店の者まで吾とゝ買とゝん
とて日毎に門前市をなす草紙の製本間にあべ摺本の
まゝを車に積て挽いるゝを途みるそのまゝ買とゝんと爭ふ
そのもある程おく右の摺本へ表紙綴糸をそへてつゝ
と懇望のかたハ悦ひてわち帰り先おく仕立賣物にせと
なり然るに慌ゝべきるこのるにより終に絶板を命ぜらきゝ
と語りぬ
○翁が著述の讀本もゝぐめあるいふとく里見八犬傳ありその
八犬傳と朝夷巡嶋記とを評判して犬夷評判記と名号け黒
表紙をかけたる横本三巻とあり自笑が彼者評判記ゝ擬へ

文政元寅年六月刊行しぬ批評は三枝園主人著述は馬琴
考訂は櫟亭琴魚なり難波と東都との書賈連名なり
發市してあかつきばし世人の評あとにつづくこと翁が名譽とふべし
文政十二巳丑年卯月ちはの七日溪齋英泉子が家に訪来
て物語のはいぐわいそく在下しぬる日曲亭翁が許にいたり
と記翁のアさきは昨日何人かやみたん家製の奇應丸一包
買ふものあり一封を遺しを先生のおん目にかけてぬはし
とらひ捨て帰りたりその一封を抜開らきて見れば春出板せし
近世説美少年録巻の三縁異亭の條下および五の巻二賦
相殺の趣向をもいとく褒て後に傾城水滸傳を識りたりと
たのんその一封に書りのを溪齋もまのあたり見たりとふ又
是より前に深川に住居する書師何のとふもの一封を投じ
たり抜きひらきて右のごとく水滸傳の著述をあざなに非難し
て原唐山の子を日本の軍に取直したる書ぶり蒙汗
薬のことを書いれしはいかぶるぞや日本には無きものの薬と
とあるよし翁これを笑ひいとくちぶり薬を原本水滸
傳の作者がよりて物のくに宋の代にあきなひしものやい
吾朝においてをや然るをさる不穿鑿をもりて人をそ
ろはに笑ふに堪たりと翁のいはれしとて溪齋ものがたり
記
嘉永元戊申八月の頃より浮腫病にて終に十一月六日沒ぬ
享年八十四歳茗荷谷深光寺に葬る

曲亭馬琴小傳補遺

馬琴氏ハ瀧澤名ハ解字ハ瑣吉ト云ふ著作堂又ハ蓑笠隱士と號ス曲亭馬琴ハ其戲号ニ原々本所割下水松平兵庫頭殿名ハ信行時ヨリ御助定奉行ニ の家士なり十四歳の時故ありて其家を出る時

風ヨ思ひ立ちなり神の供とふ句を遺して十月十四日こゝを門城出なり夫より所々居を移して後飯田町ヨ住る節ヨハ大ヨ名を發し こゝを文化十三年丙子八月廿一日舊主の許を得て其家ヨゆきらひまるるを得なり役家退去の後茲ヨ三十七年なりとふ其時の詠哥

去まゝ〜こゝを三十七年とふこの秋おほけなく　君のゆゑ
かうふりつゝまゐるべき旨被ヨ仰下されはべりおそれよろこぶのこゝろをよこゝをおりをる人まで奉りをる

波の花道〜むらけつみをちあまをなゝと瀬ヨ乘亀の浮木に是其高名なるに按て舊主の許を得なり

寛政三年辛亥の春用盡貳分狂言とふ二冊物を作る是翁が艸双紙と作る初筆なりと云寛政七年乙卯の夏高尾船字文五卷を綴る是翁が中本のよみ本の初筆ニ文化元年甲子月氷奇縁五卷を作る是翁が半紙形繡像よゝ本の初筆なりとふ是より後年々出る所の讀本艸雙紙の類貳百餘種殊ヨ里見八犬士傳ハ九編百數十卷椿說弓張月朝夷巡島記等大部の稗史數種を綴る實ヨ

皇朝小說家ハ巨擘ヨて前未聞の人此後も亦可無比翁弟子を取る事を好まで門人とふ者一人もなし唯人々ヨ強ゝて其戲号の琴ノ字をゆるせし者六七人　琴川　小倉侯家臣川関左助　琴鱗　松前侯家臣柴田半平元亮　琴驢

近藤家臣嶋岡權六 後ハ國山鳥ト改めり 琴雅 御臺所人 小泉熊藏 琴梧 姫路侯家臣 加茂惠蔵 琴魚 伊勢松坂人 標亭と号 殿村精吉

琴籟 麻布古川ある 御旗本石川左金吾 畳翠と号す 書画をよくせり 此等皆其友にして門人あり

○馬琴嘗て先年其所用の廢筆の數多くあしを筐に納め あしを書肆のもとつて塚ゝ立其碑文なのごとし

曲亭公羽者稗官者流也善飾亡根之事以醒里耳綴 鑿空之話以振恆心雖戲謔似弄世頗寓勸懲焉其 所著傳奇小説大小凡二百餘種皆隨時尚以標其 異追世態而悉其變今年新於去年明年新於今年 是以詞中攝無數之幻縁紙上現無邊之化境一創 一奇百創百奇漏天機者為不尠矣其無邊無數之 寓言雖悉出翁一人之意匠假毛穎氏之資者二十 年於此噫毛穎氏亦甚勞矣夫稗官脞記者鄙事也 毛穎氏勞鄙事而費其精〻費則頭禿頭禿則人弃 之既假其資而弃之則其精蘊而鬱矣豈得無祟耶 於是欲瘞枯管而祀之中山途遥言歸未迨因留殯 于東都之郊舉之以布囊斂之以瓦甎庶幾永安于 茲冢在於谷中新堀山之上乃建之石而勒其銘不 亡勞也銘曰

若魂氣則無不之也無不化也汝化矣則將奚處奚
歸乎問之無聲叩之無音汝傚毘耶氏之默耶抑患
貫中氏之瘖耶瘖耶默乎吁戲乎噫得無箴後之戲謔
乎於是乎銘于石

文化六年己巳春二月　鵬齋龜田興撰并書
掖齋狩谷望之篆額

翁名解字瑣吉一稱馬琴曲亭其別號也姓瀧澤氏
江戸人世仕某藩為武弁之家父諱興義性長技擊
而射御之術無不悉究其奥矣有子數人翁其季也
翁以多病故杳而隱市其所著詭詞冊子巧寫憂樂
愁啼嬉笑怒罵之光景便閭人穉子估客村農不能
不為解頤酸鼻千般萬般之態是以名噪一時坊賈
捷利者獲翁之新著以為居奇而得其贏餘者有年
矣今茲坊賈等與翁嗣子興繼相謀而建之盃飲水
思源之誼也云

鵬齋興再識

翁隨筆物

一蓑笠雨談一烹雜記一燕石雜誌一玄同放言
一玄同二編　一鸞旅漫録（写本）一ゝゝゝゝ（写本）一後北為の記

公羽著述大部之物

一里見八犬傳九輯　百十一冊
一椿説弓張月　二十九冊
一朝夷巡嶋記六編　三十冊
一開卷驚奇俠客傳四編　二十冊
一近世説美少年録三編　十五冊
一同嗣刻玉石童子訓
以上讀本
一傾城水滸傳　十三編　五十冊
一金毘羅舩利生纜　七編　二十八冊
一殺生石後日怪譚
一風俗金魚傳
一新編金瓶梅　十輯　四十冊
右繪雙紙
右の他の讀本
一松染情史　一三七全傳南柯夢　一南柯後記
一新解脱物語　一俊寛嶋物語　一頼豪阿闍梨怪鼠傳
一松浦佐夜姫石魂録　一同後編　一雲紅絶間雨夜月
一皿皿郷譚　一旬傳實々記　一絲櫻春蝶奇縁
絶筆他の艸双紙女郎花五色石臺　三編　十冊　うゝ筆を止む

曲亭翁辞世

世北中の名く城のうち乃まへ　かへすもあめと出家人形

法名　著作堂隠譽蓑笠居士

翁の傳記のごとき奇譚妙話多くと雖別まろせ書ものとび
まよゆづりて茲ハ大畧をもるのみ

直亭驥德

琴梧規矩

姫路藩の士氏ゝ加藤俗称惠藏

櫟亭琴魚　俗称殿村精吉

勢州松坂の人なり著述ハ京山子が編述せる小櫻姫風月
奇観ゝつゞきて風月後記といふものあり又師馬琴が著述
青砥藤綱模稜案の三輯を撰ぶ天保二卯十一月廿一日沒せ

享年四十四才 杉坂寂光山願證寺ニ葬ル 法号

櫟亭道香

鹿杖真顔 寛政五

畑芋助 同